

セミナー 第2回

日時 令和元年9月3日(火)

午後1時30分～3時30分

会場 鹿沼市民情報センター2階 子育て情報室

演題 すべての人が幸せになるために

講師 医王寺 副住職
田戸 大智さん



プロフィール

1971年神奈川県生まれ、東京育ち。1994年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。会社勤務を経験した後、母の実家である鹿沼市北半田・医王寺の後継となるため、大正大学へ入学、卒業後医王寺副住職や他寺院住職に就任。

その後、早稲田大学大学院文学研究科東洋哲学専攻へ進学し、2010年博士号(文学)を取得。現在は寺院運営に従事するほか、早稲田大学や国際仏教大学院大学、早稲田大学エクステンションセンターなどで非常勤講師を勤めている。

2018年、博士論文をもとにした著書、「中世東密教学形成論」(法藏館)を出版した。本書では、日本中世における真言密教の思想的展開について研究を行った。

△▽はじめに▽△

講師：皆様こんにちは。ご紹介いただきました田戸(たど)と申します。経験豊富な皆様方の前で、私の様な若輩者が偉そうに物を語るのは大変心苦しい限りでございますが、今日は自分の経験に基づいた心の在り方というか、社会の見方と言うか、そういう事についてお話できればいいかなと思っていますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

自分の経験に基づいてという事ですので、最初に私自身についてお話させてもらいたいと思います。私は、昭和46年生まれ48才です。大学の卒業が1994年頃、バブ

ルが若干下火になり、だんだん世の中の景気が悪くなってくるような時でありました。大学の同級生には私が足元にも及ばない様な優秀な女性が沢山いました。非常にキャリア志向が高く、今も企業の第一線で働いている人達です。なので、わたしは女性が社会進出するのは当たり前という感覚を持っています。また、「LGBT」と言われる性的マイノリティについて宇都宮大学の先生が詳しいお話をされるようですけど、実は私の大学院の後輩にゲイの人が居ます。その人は今、高校の先生をしていて、自らの性的な事について学生さんに全てオープンにしているという事を聞いております。若い人の意識、特に中高校生の意識は変わりつつあるのかなと思います。身近にそういう方が居ると言う事もあり、性的な事に関しても私自身違和感がないという所がございます。

さて、今日のテーマは「全ての人が幸せに生きる為に」。壮大なテーマでございます。これ、私が決めた訳じゃないんですよ。この壮大なテーマを頂いたプレッシャーのせいか、今朝4時に目が覚めちゃいまして(笑)。でも今日はお説教ではございません、私のわずかな経験に基づいて、おひとりおひとりの心の在り方、そして社会や他人との関係性というのでしょうか、他の人に優しくなれるような気持ちと言うのでしょうか、そういったことが個人から社会に広がって行ければ、さらなる成熟した社会、幸せな社会につながっていくんじゃないかな…ま、そんなお話をさせていただければと思っております。それでは本題に入りたいと思います。

1. [両親との関係と人間観]

講師：私は神奈川県生まれですが、父の仕事の関係で2歳からは東京の下町、西日暮里という所で育ちました。今は鹿沼市の北半田にある医王寺の副住職を務めていますが母親がこの医王寺の生まれなんです。旧姓を国立悦子（こくりつえつこ）といいます、非常に珍しい名前ですね。現医王寺住職の国立恵俊（こくりつけいしゅん）は母の弟で、私の叔父に当たります。私の父は田戸嗣郎（たどしろう）と申しましてサラリーマンでした。ですので私は一般家庭で育ちました。ちょっと母の事をお話させて頂きたいと思っております。うちの母は大学の経済学部を卒業しておりますが、当時経済学部には女性と言うのは非常に少なかったそうです。卒業後は金融関係勤務を希望していましたが、当時の社会状況として、男女雇用機会均等法が1985年、その母体となった勤労婦人福祉法が1972年。私が生まれたのは1971年なので、まだまだうちの母が社会に出ようとする事は許されない時代だったという事ですよ。母は、結局金融関係に就職できなかった。まあ、それは本人の能力の問題だったかも知れませんが、そういう当

時の社会の状況と言うのも一因だと思いますね。

蛇足ですが、母は親戚の関係で小網という会社に入りました。ここはキッコーマン醬



油の創始者の子孫が創業した会社でありま

して、現在のコカコーラの親会社になるところ

なんです。母はこの会社に入って出来立て

のコカコーラを飲んだらしいんですが、それ

はほんとに美味しかったとよく言っていま

したね。しかしその後、母は父と知り合って

仕事を辞めて専業主婦になります。私の母は、

当時においても社会と繋がりたいという意

識を持っていた。また、夫婦喧嘩はあまり見たことがなく、父も母もお互いに尊重して相手の立場を認めるような結婚のスタンスであったと思います。私の両親は非常に教育に熱心でした。これは本当に感謝すべきことだだと思います。自立を促すという事でしょうか、小学生の頃から1時間かけて学校に通っておりました、東京だと小さいお子さんの電車通学もよくあることですが、このあたりだと集団登下校が当たり前ですよ。今振り返っても良く一人で通ったなと思います。また、お風呂などある程度の事は自分でやっていたような記憶がございます。そういう事が両親の教育方法だったのかなと思います。これが私という人間のベースになっているのは間違いないと思います。

教育と自立という事に関してですが、私は自由学園という学校に初等部から中等部まで通っておりました。自由学園を御存知の方はいらっしゃいますか？1921年に羽生もと子（はにもとこ）と羽生吉一（はによしかず）という二人によって創立された私立の学校です。羽生もと子は日本で初めての女性新聞記者です。大正時代の女性の自立運動に非常に関連があつて今日のテーマである男女共同参画にぴったりの方ですね。同時代に活躍した女性として「青踏」の平塚らいてう（ひらつからいちょう）、それから評論家で婦人問題研究者でもある山川菊栄（やまかわきくえ）などがいます。

私がこの自由学園に通っていた当時の学園長は三女の羽仁恵子（はにけいこ）という方でした。恵子の長女は羽仁説子（はにせつこ）と言いまして、説子の夫の羽仁五郎は著名な評論家、その息子が映画監督の羽仁進というように羽仁一族は非常に活躍していらっしゃいます。自由学園はキリスト教プロテスタントですので、私はキリスト教に関しては今でも親近感を持っています。お坊さんではありますけど。さて、自由学園でマスコミに取り上げられることが多いのは明日館（みょうにちかん）という建物です。

このあいだもテレビで特集がありました。フランク・ロイド・ライトという有名な方が設計した建物で池袋にあります。もともと自由学園の発祥は池袋で、そのあとにひばりが丘に移転したんですよ。明日館は建物がとても洒落ているので、もし池袋に行かれるような機会がありましたら足を運んでいただいてもよろしいのかなと思います。

2. [上野千鶴子先生のこと]

講 師：上野千鶴子先生はご承知の通り、女性学で大変著名な先生でいらっしゃいます。先日TBSテレビの「情熱大陸」という番組で上野先生の特集があったんですが、そのなかで、「私は家父長制度の敵だと言われている」と笑っていらっしゃいました。いわゆる女性学という学問が形成された際の第一人者でいらっしゃいます。今年の東京大学入学式で式辞を述べられましたが、東京大学の学生にこういう話をするっていうのがとても意義があることじゃないかなと思いました。また、私もその話を聞いて非常に共感しました。私がべらべらしゃべるよりも動画を見ていただくのが一番いいので流します。

上 野：「みなさんご入学おめでとうございます。」

講 師：少し飛ばします。

上 野：「あなたたちは選抜されてここに来ました。東大生一人当たりにかかる国費負担は年間500万と言われています。これから4年間素晴らしい教育学習環境があなたたちを待っています。その素晴らしさはここで教えた経験のあるわたくしが請け合います。あなたたちは頑張れば報われると思ってここまで来たはずですが、冒頭で不正入試に触れたとおり、頑張ってもそれが公正に報われない社会があなたたちを待っています。そして頑張ったら報われるとあなた方が思えること、そのこと自体があなた方の努力の成果ではなく、環境のおかげだったことを忘れないようにしてください。あなたたちが今日、「頑張れば報われる」と思えるのは、それはあなた方の周囲の環境が、あなたたちを励まし、背を押し、手を持って引き上げ、やり遂げたことを評価して褒めてくれたからこそです。世の中には頑張っても報われない人、頑張ろうにも頑張れない人、頑張りすぎて心と体を壊した人達があります。頑張る前から所詮お前なんか、どうせわたしなんて、と、頑張る意欲をくじかれる人達もいます。あなたたちの頑張りをどうぞ、自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力を恵まれない人々を貶めるためにではなく、そういう人々を助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。女性学を生んだのはフェミニズムという女性運動ですが、フェミニズムはけっして女も男のようにふるまい

たいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のままで尊重されることを求める思想です。あなた方を待ち受けているのはこれまでのセオリーが当てはまらない予測不可能な未知の世界です。これまであなた方は正解のある知を求めてきました。これからあなた方をまっているのは正解のない問いに満ちた世界です。学内になぜ多様性が必要かと言えば、新しい価値はシステムとシステムの間、異文化が摩擦するところに生まれるからです。学内にとどまる必要はありません。東大には海外留学や国際交流、国内の地域課題の解決にかかわる活動をサポートする仕組みもあります。未知を求めてよその世界にも飛び出してください。異文化を恐れる必要はありません。人間が生活しているところならどこでも生きていけます。あなたがたには東大ブランドが全く通用しない世界でも、どんな環境でもどんな社会でもたとえ難民になっても、生きていける知を身に付けてもらいたい。大学で学ぶ価値とは、すでにある知を身に付けるのではなく、これまで誰も見たことがない知を生み出すための知を身に付けることだとわたしは確信しています。知を生み出す知を、メタ知識といいます。そのメタ知識を学生の時に身に付けてもらうことこそが大学の使命です。ようこそ東京大学へ。おめでとう。（拍手）」



講 師：大変格調高い話ですね。東京大学の学生ですと、ある程度の親のバックボーンが必要と言われてます。要するに「周りの支えがあってあなたたちがあるんだ」ということ、さらに「あなたたちの頑張りをどうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力を恵まれない人を貶めるためにではなくそういう人々を助けるために使ってください。そして、強がらず自分の弱さを認め、支え合って生きてください。」っていう部分に非常に共感します。東京大学は、社会の第一線で活躍する人、国の屋台骨を支えていくような人材が輩出されるわけですし、これから日本の社会を担っていく人たちが自分の気持ちだけを優先させていくようだとおかしな方に行ってしまうと思います。卑近な例ですと、とある女性議員が秘書に暴言を吐いたということが1～2年前にありましたね。さらに、北方領土に行ってお酒を飲んでバカ騒ぎした議員がいます。これはマスコミの一方的な情報なので、一概には判断できない部分もありますが、あの二人に共通しているのはどちらも東京大学出身のキャリア官僚だということです。そう考えてみると、将来社会の主軸

になるであろう東大新入生の方たちにこういう話をするのは極めて大きな意味があるのではないかと思います。

この祝辞に対するアンケートでは、女性の方が高く評価して、男性の評価はその半分ちょっとくらい。男性はお祝いの席でああいう話をするのはどうなのか、ってコメントする方もいました。この祝辞から私が学んだことは、**自分が置かれている状況への客観的な視点**です。どうしても人間は、私も含めて自分勝手に物事を解釈しがちですよ。客観的な視点を持つという事は、自分が社会の中でどういう存在なのかを考えるきっかけになると思うんですよ。物事の考え方の偏り、自己中心的になりやすい見方、それを全部なくすというのは無理だと思うんです。しかし、少しでも抑制するという気持ちが、裏を返せば他の人への感謝や謙虚さにつながってくるのではないのかなって思っております。

3. [挫折と苦しみ]

講師：ここから私自身の経験についてお話しします。実は、私も母と同じく経済学科に入学しました。大学時代の事を振り返ると本当に調子に乗っていたなと思います。勉強などもせずに、ほとんど麻雀をやっていたかなあ。今の学生さんが、海外に語学留学したり、会社にインターンで行って社会勉強したりと、前向きに取り組む姿を見て



本当に偉いなと思います。自分の学生時代は酷かった。そのうえ、何か努力することもなかったにも関わらず変な自信だけあった。どうしようもないですね。実は、先々お坊さんの道に進むってことは一応気持ちの中では決まっていた、その前に社会勉強のため会社勤めをした方がいいかなと思っていたんです。ただ、さっきお話ししたとおり、何もやっていない、空っぽのような人間だったので、調子に乗っていろいろ大きな企業を受けたんですが、ほとんど門前払いを食らいました。それで非常にプライドが打ち砕かれるというか、社会から不要にされたという虚しさや劣等感も大きかった。この劣等感は今でも私の中にあります。それはまだ私自身が迷っているんだろうなというところです。結局、私は親戚の口利きで会社に勤めましたが、わずか数年で辞めてお坊さんの道に進むために東京の巣鴨にある大正大学に編入学いたしました。この時は挫折感が抜けきれずに将来の展望が見えてなかったですね。しかも、大正大学にはお寺で育っ

たいわゆる純粋培養型の学生がいっぱいいて、この人たちの問題意識が低いというか。それを見て仏教の世界に幻滅を抱いたんですね。名誉のために言いますが、学生時代ふざけていた人も後で覚醒する時が来るんですよ。覚醒しないままいつてしまったのが、女性問題とか、お金とか問題を起こしてマスコミで取り上げられるようなトラブルを起こすお坊さんであって、大多数の方は覚醒する。何かきっかけがあって、そこで覚悟を持ってお寺の道に進もうとする時が来るのです。私自身、そういう虚しさの中にいるときに仏教と出会って、お釈迦様の考えに共感したっていうのが、考え方をを変える一つの大きなきっかけだったかなと思います。

ここからちょっと仏教の話になります。お釈迦様は紀元前の方です。「ブッタガヤ」という所で悟りを開いて仏教が広まっていくんです。「ブッタガヤ」から中国を經由して伝わった仏教と、南の方を通過して伝わった仏教と二つのルートがあって、我々は北の方に流れて伝わった仏教です。ブッタガヤには大きな仏塔が立っておりまして、世界中から仏教の信者さんが集まってきます。残念ながら私は足を運んだことがないです。仏教が生まれて育ったインドは、非常に暑くて環境的に厳しい場所です。仏教では、生きる



ること自体が苦しみだということです。お釈迦様も私と同じように苦しんだということに、何か親近感というか、共感性を持ちました。その苦しみとは何なのかというと「四苦八苦」。この言葉は、もともと仏教の言葉でして八個の苦しみの事を言います。そのうち本質的な苦しみが「生老病死」生きること、老いること、病気、死ぬことです。誰でも老

いは来るわけですし病にもなります。私も皆様方もいずれこの世から消えてしまうわけですが、それは普遍の真理であります。死んだあとはどうなるとかいろいろ言われますが、あまり真面目に考えても結論がでる話ではございませんからね。我々にとってはどうしようもないことなんです。そして現実的な苦しみとして、愛するものと別れる苦しみ、嫌いな人と会う苦しみ、欲しいものが得られない苦しみ、身も心も思い通りにならない苦しみの4つがあります。これもとても普遍的ですよ。誰にでもある事かと思えます。私は、「ああ、お釈迦様もこういうことで苦しんでいたんだ」と考えたときに、それまで自分が思い悩んでいたことがふっと消えるような気持ちになったんです。

こういう苦しみがなんで生まれるのかというと、これが一般的に言われる煩惱ですね。

簡単に言ってしまうと心が汚れているっていうこと、別名は惑（わく）、惑う、迷っているわけです。どうしたって心が汚れているのが人間なのかなとは思いますが、とにかく汚れているものを少しでもきれいにしましょうというのが仏教の目的といえますか。煩惱とはあくなき欲求、囚われの心の状態です。欲求というのは尽きませんよね。ある事に満足したとしても、また何か別の事にとられるというエンドレスな部分がある。煩惱には二つの側面があって、一つは我執（がしゅう）、自分自身にとられるということです。「私が」、「俺が」という自我意識というのでしょうか。これは生きる上での一つのモチベーションとして非常に大きなものではあります、それに囚われてしまうと物事がきちんと見えなくなってしまう。二つ目はそれに付随する考え方で我所執（がしよしゅう）と言います。私の物への囚われです。たとえばお金とか、財産とか、地位とか肉体とか、そういうものに対する囚われが生じるのです。心が汚れていると狭い偏った見方しかできず自己中心になっておのずと「俺の物だ」とモノを囲い込もうという考えに結びついていくのかなと思います。欲求というのは満たされなかったら苦しみや悲しみが生じる。でも満たされたとしても次の欲求が生じて尽きることがないということです。

私自身、20代前半から半ばくらいまでを振り返ると、とにかく自己中心的なものの考え方に囚われて非常に未熟な存在だったのに、自分では全然そういうことがわかっていなかった。さらに、就職によって社会的な地位を作りたいという欲求があったが結果的には失敗して、全てが自分自身に原因があったということがよくわかりました。そうして自分を見つめなおしたとき、周りの人から支えられていたと強く認識いたしました。こうした挫折という経験が、私にとって学びとなり、今思うととても価値のあることだった、改めて自己と向き合うことができたなという風に思っております。家内にこの話をすると、「あなたほんとにその経験があってよかったね」って言うんですよね。それ、どういう意味なのかなと思うのですが。今もまだ自己中心的であるから、その経験がなかったらもっと自己中心的であったという意味を含んでいるのか、ちょっとわかりませんが、いずれにせよその時があって、私の今に至るわけですね。そういう風に振り返っております。では、ここで10分ほど休憩させていただきたいと思います。

—休憩—

4. [マンダラ的世界観と平等性]

講師：ここからはマンダラ的世界観と平等性を見ていただきます。マンダラとは仏教に基

づく世界観です。特に密教ですね。「マンダラ」という言葉ですが、インドの古い言葉のサンスクリット語で「あらゆるもの」、「全てを備えた」、「完全無欠な」というような意味合いになります。それを漢字に置き換えたのが曼荼羅です。

一般的にマンダラというと、仏様や菩薩様が幾何学的に並んで書かれたものを思い浮かべる方が多いかなと思います。胎蔵（たいぞう）曼荼羅は女性の母体を象徴していて、真ん中の大日如来があらゆる仏を生み出す根源だという意味です。マンダラにはいろいろなものがありまして、日蓮宗を開いた日蓮が書いたマンダラでは、真ん中に南無妙法蓮華経と書いてあって、下の方に日蓮のサインがあります。四方には四天王である持国天、広目天、毘沙門天、増長天と書かれていてさらに、この中に〇〇仏とか何々菩薩とかがいっぱい書かれている。このように真ん中に核となるものがあって、いろいろなものを集約するというのがマンダラのコネクションです。また、「那智参詣マンダラ」と言っても、世界遺産である熊野那智大社や那智の滝が書かれている風景画のようなマンダラもあります。あと立体的なマンダラとして京都の東寺にある講堂の仏像の配置があります。大日如来が真ん中にいて、四方に広目天とか増長天とか四天王がいるというような形です。立体マンダラも、マンダラの一つです。チベットには砂で絵を描いて一定の儀式が終わると全部壊しちゃう砂マンダラがあります。

心理学者のカール・グスタフ・ユングがこういうことを言っています。たとえば南米の未開の民族と、ヨーロッパの極めて先端的な民族が実は同じような思考を持っている事から、人間の深層心理には何か共通な基盤があるんじゃないかと。これを「集合的無意識」というのですが、実はユングがそのことを説明するために書いた絵は極めてマンダラに近いんです。また、南方熊楠（みなかたくまぐす）という和歌山県出身の生物学者は、とにかくいろんな学問に精通していた方ですが、この方もマンダラみたいなものを説いている。マンダラというのは絵画だけでなくいろんな表現方法がありますし、いろんな人がそれに近いことを話していらっしやいます。

では、マンダラの世界観とは何なのかというと、宇宙全体を表現しています。ですから、地球も、日本も、そしてみなさんがいらっしやるこの部屋も、この世界すべてがマンダラです。そして我々もその中の住人なのです。みんなそれぞれ個性があって考え方も違う、あらゆるものすべてに価値があって光輝く存在であるということをマンダラは説くのであります。住民同士が調和を保ちつつ、主体的に生きながら、お互いに支え合って生かされる。それが網の目のように結びついているというのがマンダラ的世界観の特徴であるわけですね。世界のとらえ方としては理想に近いかもしれませんが。誰にで

も普遍的な存在価値がある。それは平等という概念に結びついていくのかなと思います。そして個々の存在価値は、他の人と支え合うことによってさらに高まるっていう意味が込められています。それは、「自利と利他」という考え方につながるのかなと思います。

「自利と利他」とは自らを利すると同時に他を利するという考え方ですね。自らを利するというのは、自身の欲望を抑制して正しい道に向かって努力するっていうこと。他を利するというのは他者に利益を与える、他者を幸せにするように行動することです。これは極めて理想論かもしれませんが、男女共同参画ということに関してここに足を運ばれている方はそういう意識をお持ちであろうかと思いますが、みなさんが少しでも周りの男性、特に年配の男性の意識を変えていくっていうことが必要かなと思います。

5. [個人の意識改革から]

講師：「すべての人が幸せに生きるために」この壮大なテーマにおいてなにが問題かという差別や偏見ですよ。女性、性的マイノリティ、それから体の不自由な方に対して。偏見は育っていく環境の中で知らず知らずのうちに植え付けられるものもある、無意識の偏見。だから意識して偏った見方を少しでも是正し、自ら意識を変えていく、



そしてそれが周りに普及するように働きかける必要があります。それがさっき言った、自利と利他ということにつながるのかなと思います。客観的な視点を持って自らを省みる事や、自分の考えが社会において妥当性があるのかっていうのは常にチェックする必要があるのではないかと思います。

さらに対立とか紛争ですね。今、日本は韓国とひどい状況になっていますね。国と国もお互い思い通りにならないから紛争が起きるんですよ。これはお互い様だと思います。相手が思い通りにならないから怒りを生じたり対立を生じたりということ。これは国と国との関係だけじゃないと思います。自制する気持ちがあると社会が機能していくのかなと思います。しかし、人間の欲求というのはなかなかコントロールできないものですから、そのことを自覚するのは他者との関係が大きい。様々な周りの人によって支えられているという気持ち、それが感謝の気持ちを生じる源になるのかなと思っております。そしてそれが差別や偏見の解消につながる一つの心の在り方、きっかけというか、そこにつながればいいかなと思っておりま

す。

自覚を持った方たちが他を利する（他者へ利益を与える）という考え方で、周りに働きかけをすることによって、さらに成熟した幸せな世界へつながるのではないのでしょうか。劇的に変化するのは難しいでしょうが、皆さんひとり一人が意識を持って行動することが社会の変化につながってくるのではないかと思います。私の経験に基づいた話が、今回の企画と結びついて社会のより一層の幸せにつながっていただければよろしいのかと思います。ここで「ご清聴ありがとうございました」となっていますが、ごめんなさい。これとは別に補足資料がございます。ここまで話したのは心の在り方とか、持ち方、意識を変えていって、それを広めてもらおうという話でございました。

6. [仏教教団と男女共同参画]

講師:ここからは、男性中心である仏教教団の極めて現実的なお話になります。さて、みなさんの中で女性のお坊さんに接する機会がある方いらっしゃいますか。鹿沼の清林寺に女性のご住職がおります。私としては、女性にもどんどん業界に参画してもらえれば良いと思うのですが、やっぱり環境によるところが大きいですね。私には5歳になるひとり息子がいますが、不妊治療をして奇跡的に授かることができました。ですから私は男でも女でも、授かることができればありがたいという気持ちだったんですが、たまたま男の子だった。そうすると、「いやあ、よかったですね、後継ぎができて」って言われるんです。女の子が生まれてたらどうなっていたのかなと思うんですよね。そこには無意識の、「お寺の後継ぎは男じゃなきゃダメだ」という固定概念があるのかな、特に年配の方、これはやっぱり刷り込みっていうんでしょうね。仏教教団にどのくらい女性の僧侶がいるかを統計化したものが資料にあります。女性僧侶になるにはいくつかルートがあるんですが、やっぱり住職寺の娘や奥様というのが一番多いようです。私が真言宗の豊山派（ぶざんは）ですのでちょっとそちらを見てください。平成24年のデータで、男性教師が2961名、女性教師が301人、教師というのはお坊さんの資格を持っている人のことです。女性の割合は男性の10パーセントくらいという事ですね。その中で女性の住職が95人です。さらに、年代別に女性教師



の数を比較したデータがあります。昭和25年は0人、昭和60年は144人、平成25年になると301人と増えています。宗派によって女性の住職の割合ってというのは異なっていますが、多くて15パーセントくらいです。

7. [仏教と女性]

講師：明治になってヨーロッパの思想が入ってくると、日本の女性観は大きく変わりました。それまで日本の社会規範は仏教の価値観で決まっていたので、女性も仏教的な価値観に基づいて位置づけられておりました。ところで仏教というのはインドで生まれたのですが、インドは非常に差別が強いことは皆さんご存じでしょうか。バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラという、身分制度（カースト制度）というのがあるって、今は差別が撤廃されたと言っていますが、このカテゴリーは未だに残っているんです。今もインドでは同じ身分階級じゃないと結婚が難しい。できないことはないけど、家族から猛烈に反発され、下手をすると殺人まで起きちゃう。さらに身分制度の枠組みの外側、アウトカーストの人達が「ダリット（触るべからざる民）」という酷い呼称で呼ばれている。この人たちへの扱ってひどいものであります。よくインドでは、女性が男性から集団で暴行を受けて殺害されたなんていう事件がありますが、女性はアウトカーストの人たちが多く、それが現実です。それを踏まえると、仏教というのはインドで生まれたものなので、もともと差別的な考え方をもっております。ここに書いてあります五障三従（ごしょうさんじゅう）もそうですね。女性には五つの障りがある。三従というのは、「女性は父親、夫、子供に従わなくてはいけない」そういう女性の人権を無視するような考え方というのがもともと仏教の中にはあります。また江戸時代、嫁に行く女性に持たせるものに、仏説玉耶教（ぶっせつぎよくやきょう）という経典がありまして、そこには妻の姿が7種類にまとめられています。母のような妻、妹のような妻、友人のような妻、妻らしい妻、召使いのような妻、夫に恨みを持つ妻、夫を殺そうとする妻などです。1～5までは男性の理想像をそのまま反映しているかのような内容になっています。しかし、実は日本では女性のお坊さんは結構活躍していたんですね。法律においても「僧尼令（そうにりょう）」という女性のお坊さんへの規律が制定されているんです。こういうものがあつたという事は、それなりに女性のお坊さんが活躍していた訳ですよ。その最たる存在が、光明皇后で、皆さんご存じの国分寺、国分尼寺を作った聖武天皇の奥さんです。さらにその娘さんに孝謙天皇という方がいらっしゃいますが、この人は天皇であると同時に尼さんでもあつた。光明皇后が活躍した時代はあま

り差別意識はなかったのではないかと思われるのですが、尼（孝謙）天皇が亡くなってから仏教の女性差別的な考え方がどんどん社会に広まっていったようで尼寺も衰退して行ってしまいます。尼寺に入るという事も非常に身分の高い女性が、結婚が難しいということで、あるいは経済的な理由から尼寺へ入るということが多かったようですね。実際、京都の方にある尼寺では、いわゆる天皇家とつながっているような方がご住職をやっているという事例もございます。おそらく今の尼寺の原型というのはこういうところ



ろでできたんだと思います。

あと、結婚の問題ですが、今、お坊さんの妻帯を認めているのはほぼ日本だけだと考えていただいてもいいかと思います。ほんとは戒律においては「女性と接触しちゃいけない」んです。でも日本ではこの戒律がいい加減になっちゃいまして、なし崩し的に戒律が無くなり妻帯というのが当たり前になってしま

った。それでも江戸時代までは公にできなかった、明治5年に男性のお坊さんは結婚してもいいよっていう法律ができたので、大っぴらに結婚できるようになったんです。話が長くなっちゃいましたね。「全ての人が幸せになれるために」というテーマに合致したかわかりませんが、心の在り方についてお話をさせていただいて、まあ最後にちょっと仏教教団における女性の立場というのですかね、それと、仏教と女性の蔑視的な関係性についてかいつまんでお話をさせていただきました。大変つたない話で申し訳なかったですが、少しはみなさんの心に残るようなことがあったら幸いです。大変長時間ありがとうございました。以上で終了させていただきます。

<<アンケートより>>

- ・人間は、他者と互いに支え合うことによって生かされているという事を、今後とも胸に置きたいと思う。
- ・煩惱＝心のよごれ。色々と意味があることが分かりました。
- ・自己反省と感謝により、明るい社会が出来るのだなお話を聞いて思いました。
- ・個性を生かしながら光り輝く存在、支え合い調和を保ちながら生かされていく。素晴らしい考え方だと思いました。

